

「階層ごとに相応しい作法として、既に「富」の

「一世に錢ほご面白き物はなし」というのは、井原西鶴の有名な言葉である。小泉純一郎総理の執政は、過去十余年の経済停滞からの脱出を「置き土産」にして、幕を閉じることになる。

小泉総理の執政への批判として頻繁に示されるのは、我が国社会における諸々の「格差」が拡大しているという趣旨の指摘である。

ところで、現下の「格差」批判の議論は、上層であれ中層であれ下層であれ、それぞれ社会階層にはそれぞれに相応しい作法があるということをお忘れしている。

たとえば、「富」の恩恵に与るに至っていない中層、下層の人々の作法とは、「一身一戸を齊治して恒産有りて恒心有り、之を吾人自治の本拠とせん」という濱口梧陵の言葉が示す通りに、自らの恒産を築いて「自尊自立」を達成するところにある。彼らにとっては、「富」を追求する振る舞いは、「自尊自立」の基盤を築く意味において何ら非難

に値しない。

その一方で、既に「富」の恩恵に充分に与った上層の人々に要請される作法とは、その「富」を広く社会全体の利益のために生かす構想を用意し、その構想を実現に移すこと

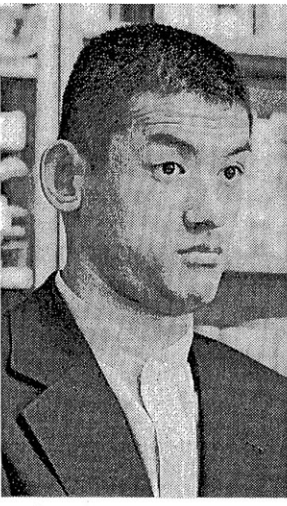
富者に求められる振る舞いとは

とである。そうした作法は、今や適切に踏まえられているといえるであろうか。因みに、筆者は、大学に入りたての一年生を相手に課しているレポートの課題として、次のようなものを示したことがある。読者諸賢にも是非、考えをいただきたいものである。

「ある日、ある富豪が貴君に10億円を提供すると申し出てきました。ただし、次のような条件が付いています。①貯金に回してはいけません。②〇〇(住宅、自動車...)を置くという使い方をしてはいけません。さて、貴君は10億円をどのように使いますか」

は、誠に縁遠いものであるけれども、ビジネスの世界で成功を取れば、そうした「富」は決して手の届かないものではないであろう。近年における日本資本主義社会の「鼻祖」と呼ぶべき堀江、村上の両氏も、そうした「富」を当初から手にしていたわけではない。

論 正



政治学者 兼任講師 東洋学園大学 櫻田 淳

「自らの「富」をどのように使うのか」という話を聞いたことがない。若き日の堀江、村上の両氏に対して前に触れた「10億円の使い方」の課題を示したならば、彼らが世の人々を矚目させるような構想を示し得たかは、定かではない。我が国で「富」を持つ人々には、「富」を自己目的としなかつた資産家の肖像は、枚挙にいとまがない。

別段、米国に事例を求めなくとも、昔日の日本には、「富」を自己目的としなかつた資産家の肖像は、枚挙にいとまがない。

江戸時代中期、大阪・堂島での米投機で成功を収めた本間宗久が築いた「富」は、代々、庄内藩の御用を通じて、地域の振興や民生安定のために費やされた。近代以降で

格差批判を読むもう1つの視点

も、たとえば渋澤栄一、岩崎彌助・小彌太父子、大原孫三郎といった資産家は、公益事業への出資によって、後世に名を残したのである。

均すことが解決策に非ず

このように考えれば、現下の「格差」の絡みで議論されなければならぬのは、どのように、「格差」それ自体を均していくかというよりも、どのように、それぞれの社会階層の人々が、それぞれに相応しい振る舞いをしていく折の「共通の諒解」を再び作り直していくかということであろう。

前に触れたように、「格差」論議の文脈の中で相対的に中層や下層に位置する人々にとっては、「富」の追求を通じて「自尊自立」の実現は当然の振る舞いであるかもしれないけれども、一旦、「富」を得て上層に連なってしまうとは、同じ振る舞いを続けるわけにはいかない。

我が国の人々にとっては、そうした事情を確認することが大事であろう。

(さくらだ じゅん)

※記事・写真等は産経新聞社の許諾を得て転載しています。著作権は産経新聞社に帰属。記事、画像等の無断転載はお断りします。